鹿島台町　東要害貝塚

現地説明会資料

埋葬された人骨

平成16年９月18日（土）　１時30分～

鹿島台町教育委員会
宮城県教育委員会

【調査要項】

１．所在地　　志田郡鹿島台町平渡字東要害
１．調査原因　鹿島台町国保病院再建事業に伴う事前調査
２．調査主体　鹿島台町教育委員会
３．調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
４．調査面積　約2,000㎡
５．調査期間　平成１６年５月１９日～平成１６年１０月上旬（予定）
６．調査協力　東北大学文学部須藤隆教授、東北大学総合博物館柳田俊雄教授、東北大学医学部百々幸雄教授、東北大学理学部松本秀明助教授、国際日本文化研究センター那須浩郎非常勤研究員、鳴瀬町奥松島縄文村、鹿島台町国保病院、鹿島台町公民館、鹿島台町保健センター、鹿島台町立鹿島台小学校、大成建設、広進建設

写真１　調査区遠景（西から）

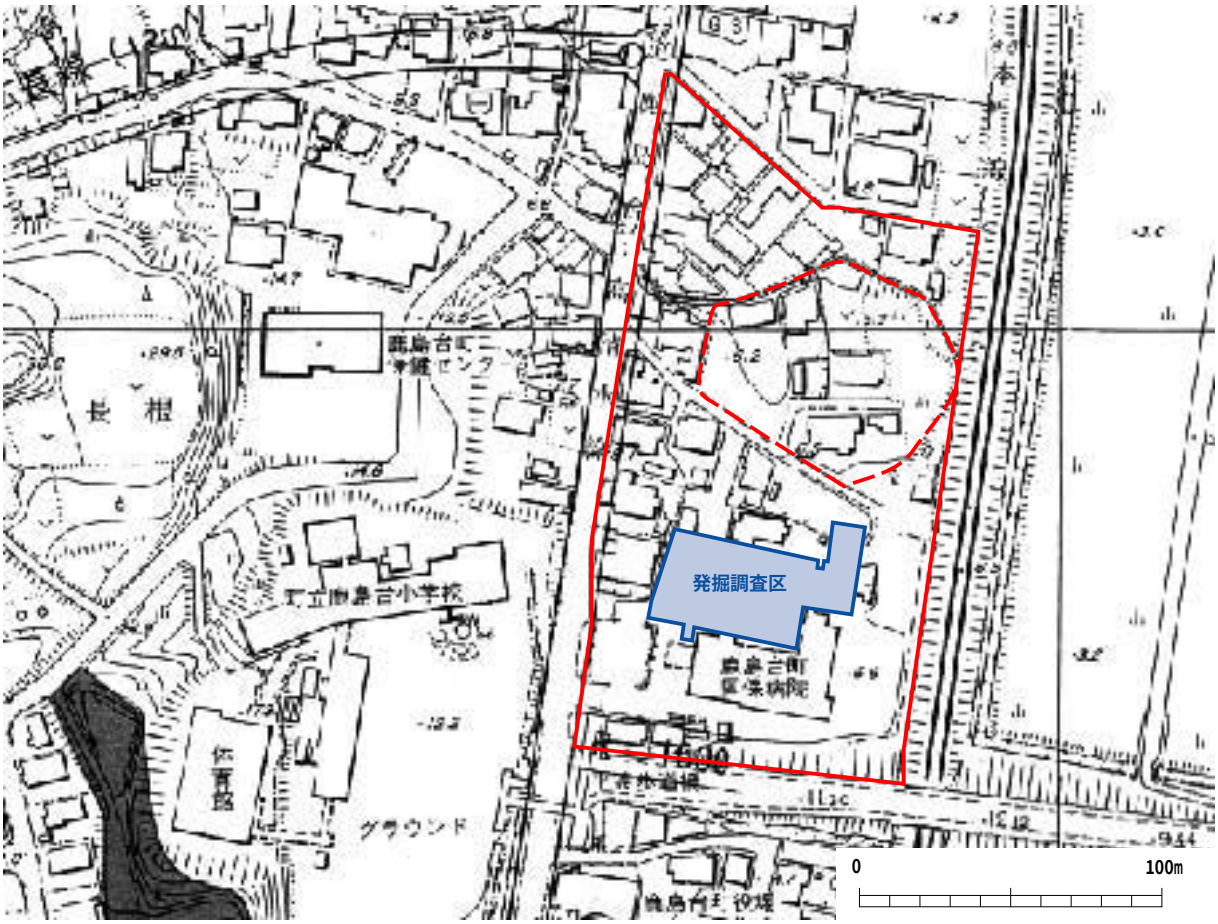
１．はじめに

東要害貝塚(ひがしようがいかいづか)は志田郡鹿島台町平渡字東要害に所在します。縄文時代前期初頭頃(約6,000年前)から中期中葉頃(約4,500年前)にかけての貝塚として知られていました。貝塚とは、貝などの食べカスを多量に投げ捨てたものが残った遺跡です。東要害貝塚の形成され始めた頃には、海が内陸部まで入り込んでいました。その後、次第に海は後退していきますが、比較的海に近い環境であったとみられます。鳴瀬川水系には大郷町大松沢貝塚など内陸部の奥まで貝塚が残されています。

昨年の宮城県北部連続地震で大被害を受けた鹿島台町国保病院を今年度に建て直しすることになり、東要害貝塚の南に隣接していたことから、確認調査を実施したところ、病院敷地の大部分が遺跡の範囲内に含まれることがわかりました。そこで、宮城県教育委員会、鹿島台町教育委員会、鹿島台町国保病院の３者で協議を行い、病院再建箇所について発掘調査を実施することになり、５月19日より発掘調査を開始しました。

また、地震の被害を受けて建て直される鹿島台町役場についても確認調査を実施し、病院周辺の分布調査も行いました。これらの調査結果と今回の発掘調査の結果を併せてみると、東要害貝塚の範囲はこれまで知られていたよりも南と北に大きく拡大しました(第１図)。

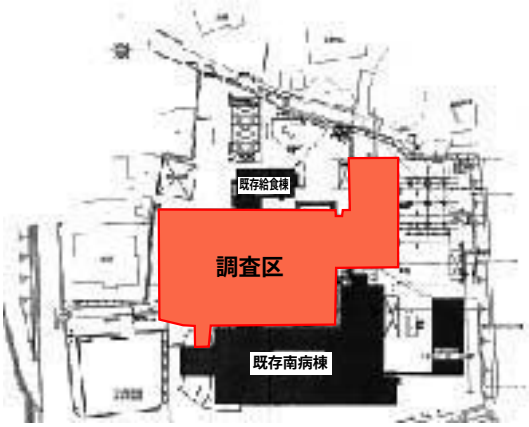
遺跡は鹿島台小学校、鹿島台町保健センターの立地する丘陵から東に延びる低くなだらかな丘陵上に立地し、今回の発掘調査地はこの丘陵の南側緩斜面にあたります。



第１図　東要害貝塚の位置と範囲　(塗りの範囲が遺跡範囲、破線は変更前の遺跡範囲)

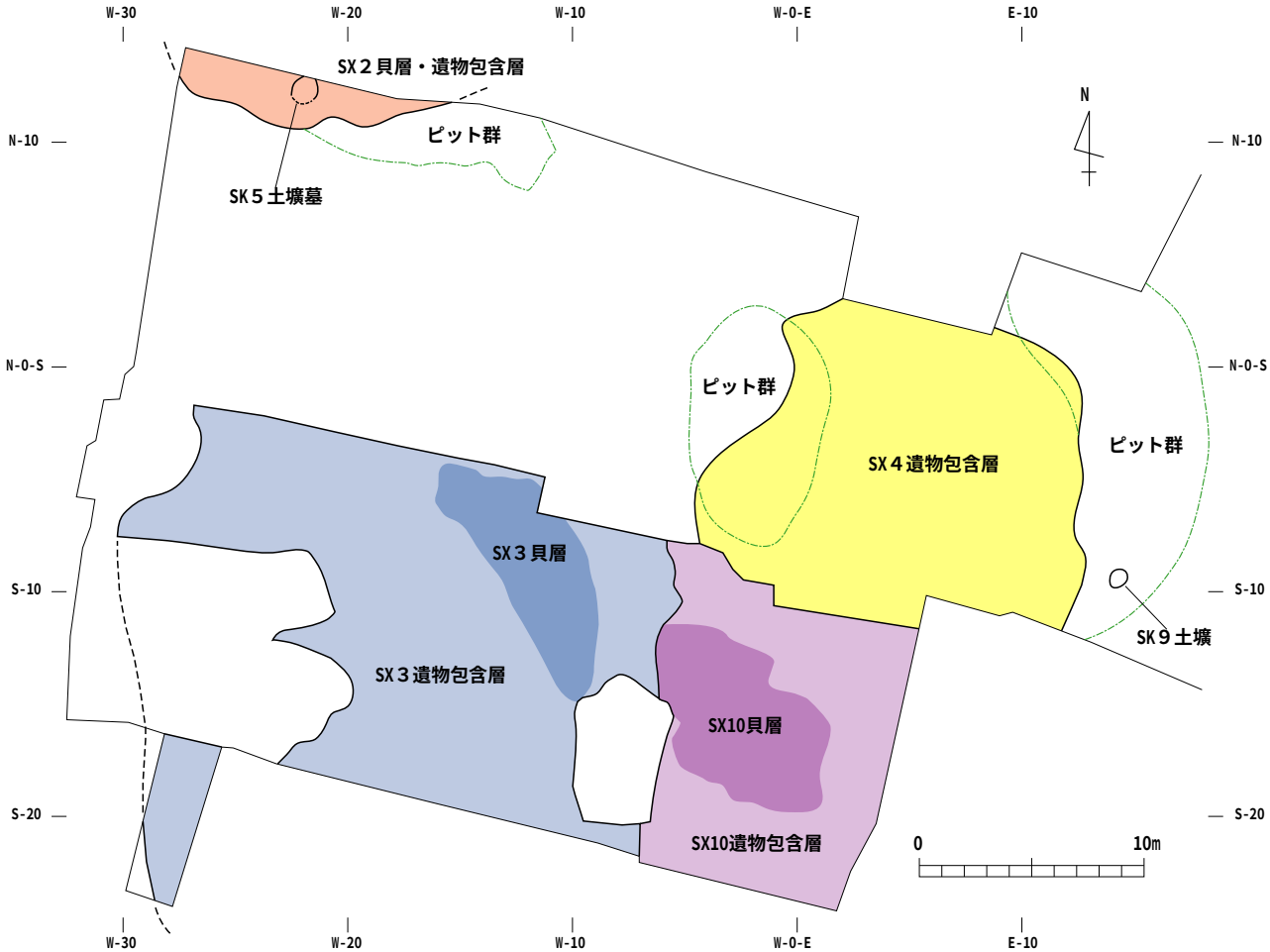
２．検出された主な遺構

検出された遺構の多くは縄文時代前期初頭頃（約6,000年前）から中期中葉頃（約4,500年前）にかけてのもので、他に古代～中世の遺構が少数あります。縄文時代の遺構には、貝層とその下に広がる遺物包含層３箇所（ＳＸ２・３・10)、遺物包含層１箇所（ＳＸ４)、住居跡を構成するとみられるピット群３箇所、土壙墓１基（ＳＫ５）フラスコ状土壙１基（ＳＫ９)、ピット、土壙多数があります（第３図)。古代から中世の遺構には井戸跡１基、ピット少数があります。



第２図　調査区位置図

写真２　調査区全景（西から）



第３図　遺構配置図

（１）ＳＸ２貝層とその下の遺物包含層、土壙墓

調査区北西部に位置します。ヤマトシジミを主体とする約10ｃｍの厚さの貝層（中期初頭、大木（だいぎ）７ａ式）、その下に獣骨・鳥骨・魚骨を多く含む厚さ約40㎝の土層（中期初頭、大木７ａ式）、さらにその下に約30ｃｍの厚さの遺物包含層（前期、大木６式～上川名（かみかわな）上層式）があります。

貝層下では多数の土器がまとまって出土した面があり、ここに生活面があったとみられます。地山面などで多数のピットも検出しました。他に埋設（まいせつ）土器遺構１基が見つかっています。

【ＳＫ５土壙墓】

貝層直下で土壙墓1基（ＳＫ５）を検出しました。成人女性１体（年齢20代後半～40代、身長約152㎝）が手足を折り曲げて横向きに埋葬（屈葬（くっそう））されていました。

写真３　ＳＫ５土壙墓

ＳＸ２貝層直下で検出しました。100㎝×80㎝、深さ30㎝の穴の中に手足を折り曲げ横向きにして、成人女性１体を埋葬(屈葬)しています。年齢は20代後半から40代程度。身長は約152ｃｍで、当時としては比較的背の高い女性です。虫歯が数本見つかっています。死因は不明です。

また、土壙墓からはほぼ完形の深鉢形土器１点(写真17)と大破片２点(写真17)も出土しており、副葬品とみられます。さらに、ヒトのユビ骨に孔をあけた垂玉(写真18の中央)が首の付根付近から発見され、装身具として身につけていたとみられます。時期は出土した土器(大木７ａ式)からみて、縄文時代中期初頭頃(約5,000年前)のものです。

写真５　ＳＸ２貝層・遺物包含層下のピット群（東から）

ＳＸ２貝層・遺物包含層下の地山面などで、ピットが多数検出されました。住居跡の一部である可能性があります。

写真４　一括土器の出土状況

ＳＸ２貝層下では土器がまとまって出土した面があります。多くの土器がつぶれた状態でした。

（２）ＳＸ３貝層とその下の遺物包含層

調査区の南西部に位置します。貝層の残りが最も良好な場所で、南東に向けて傾斜する浅い窪地に12m×４㎡の範囲で貝層が広がっています。貝層の厚さは最大30㎝あり、細かく見ると、上から純貝層、破砕貝層、炭や獣骨・鳥骨・魚骨を多く含む土層、純貝層、混土貝層の５層に分けられます。いずれもヤマトシジミを主体としていますが、下層ではカキも目に付きます。貝層下には４層の遺物包含層があり、厚さは最大約50㎝あります。貝層直下の土層には灰・炭・魚骨・獣骨・鳥骨などが多く含まれています。

貝層中の出土土器で時期のわかるものはあまり多くありませんが、貝層下の土層上面より縄文時代中期初頭の大木７ａ式の土器、それ以下の土層から縄文時代中期～前期の土器が出土しています。

上：写真７　ＳＸ３貝層の調査状況

左：写真６　ＳＸ３貝層の広がり（南から）

写真８　ＳＸ３貝層・遺物包含層断面

写真９　ＳＸ３貝層下部断面のアップ

写真10　ＳＸ３貝層中の土層から出土したイノシシの下顎骨

写真11　ＳＸ３貝層直下の土層上面から出土した一括土器

ＳＸ３貝層・遺物包含層断面の剥ぎ取り転写

ＳＸ３貝層・遺物包含層では、鳴瀬町奥松島縄文村の協力を得て、残りの良い貝層・土層断面の剥ぎ取り転写を行ないました。以下の手順で剥ぎ取られた転写面は水洗・仕上げ整形されて、展示されます。

写真①　断面の清掃

写真②・③　合成樹脂の塗布と布の裏打ち

写真④　乾燥後に剥ぎ取り

写真⑤　剥ぎ取られた転写面

（３）ＳＸ10貝層とその下の遺物包含層

調査区の南東部に位置します。貝層の厚さは最大15㎝あり、２層に分けられます。上層は純貝層、下層は混貝土層で、いずれもヤマトシジミを主体としています。貝層下には４層の遺物包含層があり、厚さは最大約60㎝です。

ＳＸ３貝層・遺物包含層との間に攪乱が大きく入り分断されていたため、これとは別な名称を付けて調査しましたが、貝層や遺物包含層の特徴が共通していることから、ＳＸ３・10は一連の貝層・遺物包含層であると考えられます。ＳＸ３・１０は南東に向けて傾斜する窪地に堆積しており、双方を合わせると、貝層の範囲は22m×7mとなります。

上：写真12　ＳＸ10貝層上面の調査状況（南から）

左：写真13　ＳＸ３・10全景（東から）

（４）ＳＸ４遺物包含層

調査区北東部に位置します。６層に分けられ、厚さは最大約80㎝あります。１層が縄文時代中期（大木８ｂ式）、２～６層が縄文時代前期（大木６式～大木１式頃）のもので、南東にむけて傾斜する浅い窪地に堆積した土層です。５層には人為的に灰・炭・焼土や土器・石器などが捨てられていました。遺物包含層中にピットが少数あり、縁辺部にはピットの集中する箇所もあります。ＳＸ10貝層下の遺物包含層と一部重複し、この遺物包含層よりも古いとみられます。

写真14　マグロ椎骨出土状況

６層上面よりマグロの椎骨がくっついた状態で出土しました。ぶつ切りにして身を取った後、投げ捨てたものとみられます。

写真15　ＳＫ９土壙

ＳＸ４遺物包含層の東側縁辺部でみつかったフラスコ状土壙。平面形が円形で、断面形がフラスコ状です。木の実などを貯蔵したものと考えられます。

写真16　ＳＸ４遺物包含層の東側のピット群（南から）

ＳＸ４遺物包含層の東側縁辺部でみつかったピット群と焼面。ピットの中には柱痕跡のあるものもあり、住居跡など建物の一部である可能性もあります。出土遺物の多くは縄文時代前期のものであり、これらのピットにはこの頃のものが多いとみられます。

３．主な出土遺物

主な出土遺物には、縄文土器（上川名上層式、大木１式～大木８ｂ式）、石器（石鏃（せきぞく）・石匙（いしさじ）・石錐（いしきり）・石槍（いしやり）・石箆（いしべら）・磨製石斧（ませいせきふ）・砥石（といし）・磨石（すりいし）・凹石（くぼみいし）・敲石（たたきいし）・石皿（いしざら））など）、骨角（こっかく）製の装身具（竪櫛（たてぐし）・ヘアピン）、玉類（琥珀玉（こはくだま）・ヒトユビ骨製垂玉（たれだま））、貝（ヤマトシジミ主体・オキシジミ・カキ・アサリ、ハマグリ・アカニシなど）、獣骨（シカ・イノシシ・タヌキなど）、鳥骨（ガン・カモ・ハクチョウなど）、魚骨（コイ・フナ・ウナギ・イワシ・スズキ・ボラ・マダイ・クロダイ・フグ・マグロ・エイなど）など多数があります。

写真18　ヒトユビ骨製垂玉（S=1/1）

ヒトユビの基節骨（親指、写真中央）1点、中節骨（どの指かは不明）2点の末端に孔をあけ、垂玉に加工したものです。中央の1点は1号人骨の首の付根から、1点はＳＫ５土壙墓内から、1点はＳＫ５土壙墓付近で見つかりました。

写真17　ＳＫ５土壙墓出土土器（S=1/5）

ＳＫ５土壙墓内に副葬された縄文土器です。いずれも深鉢形土器で、縄文時代中期初頭（大木７ａ式、約5,000年前）の特徴をよく表しています。

写真19　琥珀玉（S=1/1）

扁平な形に整形され、長軸方向に穿孔が施されています。ＳＫ５土壙墓付近から出土しました。

４．まとめ

①遺跡の範囲がこれまで知られていたより南と北に大きく拡大することがわかりました。遺跡は町立鹿島台小学校、鹿島台町保健センターの立地する丘陵から東に延びる低くなだらかな丘陵上に立地し、今回の発掘調査地はこの丘陵の南側緩斜面にあたります。調査区内でみつかった貝層・遺物包含層は窪地に投げ捨てたゴミです。調査区内の高まりでは住居跡の可能性があるピット群も発見されていますが、居住域については今後の課題です。

②貝層とその下に広がる遺物包含層３箇所（ＳＸ２・３・１０）、遺物包含層１箇所（ＳＸ４）の他ピットなど多数の遺構を検出しました。これらは出土土器からみて縄文時代前期初頭頃（約6,000年前）から中期中葉頃（約4,500年前）にかけてのものです。多数の土器や石器が出土しましたが、通常の縄文時代遺跡ではあまり出土しない獣骨、鳥骨、魚骨など縄文人が食用にし、道具の材料としていた自然遺物も多数出土しました。当時の文化や食生活を知る上で重要な資料が得られました。

③縄文時代中期初頭頃（大木７ａ式、約5,000年前）の土壙墓１基がみつかり、中から年齢20代後半から40代、身長約152㎝と推定される成人女性１体が手足を折り曲げて横向きに埋葬（屈葬）されていました。ヒトユビ骨製垂玉を身につけていたとみられ、当時の縄文人の葬制や骨格を知る上で貴重な調査例となりました。

石鏃（S=1/3）

矢の先端につける石製のヤジリです。この時期の石鏃は矢柄につける中茎をもたないものが一般的です。

石匙（S=1/3）

ナイフとして使用されました。縦長のものが多く出土しています。

骨角製竪櫛
（S=1/3）

骨角製ヘアピン
（S=1/3）

石槍・石錐・石箆（S=1/3）

石錐は穴をあける道具、石箆は木・骨を削ったり皮をなめしたりする道具です。

磨製石斧（S=1/5）

樹木の伐採や加工に使用されました。写真左の石斧には柄に装着した痕跡が残っています。

砥石・磨石・凹石・敲石・石皿（S=1/5）

砥石は研磨具で、磨石・凹石・敲石・石皿は木の実や植物の根・茎などを割ったりすりつぶしたりするのに使用されました。

貝（S=1/5）

獣骨・鳥骨・魚骨（S=1/5）